想像霊界

RYUNOSUKE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
想像霊界

【Ｎコード】
Ｎ２９６５Ｚ

【作者名】
ＲＹＵＮＯＳＵＫＥ

【あらすじ】
夏休み前。俺は図書館で既に出された夏休みの宿題と戦っていた時だ。
「お兄ちゃん！当たったよ！」
妹がインターネットでの懸賞に当たったらしく。夏休み、旅行に行くこととなった。
行先は…不明。ミステリーツアーだ。
ミステリーという響きにひかれてではなく、妹の付き添いで参加した旅行だったが。

俺達、変な事に巻き込まれたようだ。
世界が止まっちまったんっだからな。

―1―

電車に揺られている。
たまにくるガタン、ゴトンという振動が気持よく、寝てしまいそうだ。
て言うかもう寝ている。
こんな事を考えているのだから寝ている訳ないだろ、と思うが俺は寝ている。

夢を見ているからだ
ブラックホールに吸い込まれそうな宇宙船の船長
それが俺が今見ている夢。
「お兄ちゃん、早く起きて、着くよ」
現実世界で妹の声が聞こえる。夢世界では船員が俺に言う。
「船長、このままでは吸い込まれます！」（夢）
寝ているので夢世界の声の方が現実世界より聞こえやすい
「大丈夫だ問題ない。俺に任せろ。」
これが俺の出した答え。夢世界にだけ言ったつもりが現実でもそう言ったらしい。
「ダイジョウブじゃない！早く起きろ！」
両頬に痛みが走る。つねられた。俺はゆっくり目を開ける。

まずは状況確認。
・荷物は俺も妹も寄進と持っている　ＯＫ
・妹が怒っている　ほっといちゃいけないが、とりあえずほうっておく
・電車のドアが開いている　どっかの駅に着いたんだろう
・ドアの上の電光掲示板には俺たち二人の降りるべき駅の名がある
…！

以上の事を総括すると…
「お兄ちゃん、降りるよ」
妹はそう言ってさっさと降りてしまい、俺もゆっくり立ち上がる
「早く！」
「ハイ！」
ちょうどそこで”ドアが閉まります。ご注意ください”のアナウンスが終わり、俺はダッシュで降りようとするが…
ドガッ
「うっ…」
ドアに挟まれた。
目の前の妹は怒った顔でため息をついて
「お兄ちゃんのバカ…」
小さな声でそう言い改札の方へさっさと歩いて行ってしまった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

夏休み前…先週にサプライズがあった。
期末テストの復習はすでに終わらせていたので、既に出された夏休みの宿題を近くの図書館でやっている時だ。（高校生にもなると宿題が多いんだよなぁ～。）

どんな所にも“ルール”というものがあり、その時俺がいた図書館にももちろんあった。
・飲食禁止
・本は丁寧に扱う
他にも色々あるが、すべての図書館共通の、鉄のルールがあるとしたらこれ
・騒がず、他の人に迷惑をかけない
このルールがあるおかげで図書館はとても静かで、俺を含めたすべての図書館利用者は快適に本を読んだり、勉強したりしていたのだ

が…
「お兄ちゃん！やったよ、わたしやったよ！」
…静寂は破られた。音源は俺の横に立っている少女、つまり俺の妹だ。
「おい、アホ、ここは図書館だぞ。静かにしろ。」
「へっへっへー、聞いて驚くな。なんとなんと！」
俺の言葉は全く耳に届いていないらしい。あとおれの人差し指を口に当てている”静かにしろ”ジェスチャーも気づいてない。
「なんと！…って、相槌うってよ…」
「ああ、ゴメン…じゃない、ちょっとこっち来い。」
「ヤメロキサマナ#%&$@」
収まりそうにないので妹の口を手で押さえて強制連行。図書館の外へ流刑だ。
妹が手足をバタつかせて俺の手から逃れようとしながら、「ム～」とか「グー」とか言っているがここは図書館。静かにできない奴は外へ連れ出す。

暑い。流石は日本の夏。空は晴れて雲ひとつない良い天気、って良い天気すぎるよ。
本日の雲の勤務時間に昼は入っていないとお天気おねえさんは言っていた。雲もたまには真昼間に顔を出してくれてもいいのに。恥ずかしがらずにおいで―。くーもやーい。

外に出たところでやっと妹を解放する。
「プハ～何すんのお兄ちゃん。危うく窒息しそうだったよ」
「スマンスマン、でも図書館であんなに騒ぐお前が悪い。気をつけろや、おかげで注目の的だ。」
妹は反省した顔になったが、
「ごめんなさい…でも、すごいんだよ。旅行だよ、旅行に行けるん

だよ。」
すぐ笑顔に戻った
「嘘つくために図書館で騒ぐなよ。」
嘘だとすぐわかる。なぜかって？うちは貧乏…じゃないな、お金が無いからだ。

幼い頃俺たち兄弟二人は両親を亡くした。本当にちっちゃかったころの事だ。顔なんて覚えていない。
今は定年退職して年金をもらって生活している祖父母と暮らしている。
流石に年金だけじゃ生活できないので、二人はパートに出て、そのお金で生活している。
高校生一年生の俺と中学三年生の妹の学費がかなりかかるからだ。
俺は中卒で働こうとも一時期考えたが、祖父母が「お金のことは心配するな、大丈夫だ。」と言ってくれたおかげで俺はいま高校一年生。

そんな家庭状況なので旅行に行くお金なんて全然ない。宝くじにでも当たらないと無理だが、外れた時がもったいないので宝くじは買わない。
よって旅行に行くなんて夢の話。すなわち妹の言っている事は嘘。
ハイ、この話はこれでおしまい。

「ちょっと待った――――――！！！」

俺が夏休みの宿敵のもとへ行こうとしたら、妹はそう言って俺の腕を両腕と胸で抱き締めた。逃がさないという意思表示と受け取る。
「嘘じゃないよ本当だよ！」

あ…ちなみにこの時俺の腕は胸には全然触れてなかったぜ。
理由は単純。俺の妹…彬(りん)には胸が無いからだ。
まさにペッタンコ。まさにまな板。（これ言うと怒るから口には出していない。）
本人はかなり気にしているようだが、その意志とは裏腹に、その胸は”発育”という単語を放棄した…いや、元からなかった…みたいな感じだ。
可愛い童顔と低い背とのおかげで実際の年よりかなり幼く見える。
ロリコン野郎はイチコロだ。

え？俺はどんな感じかって？聞かないでくれよ。”普通”としか言えないんだから。
名前？ああ、まだ教えてなかったな。練(れん)だ。名字は…教えなくても良いだろう。

話がそれたな。戻す。

彬の顔が真面目だったので聞いてやることにした。
もちろん、この真夏の炎天下の下で立ち話ってのは流石にいただけないので、家に帰って俺の部屋で聞く。（クーラーは付いてないけどね）

部屋に腰を下ろしてすぐに、彬は話し始めた。
「え～とえ～とぉ…どこから話せば…こないだケンチョ…懸賞に…」
「落ちつけ、深呼吸しろ」
そう言われた彬は二回深呼吸して（それでもまだ興奮していたが）話し始めた。

どうやら懸賞に当たったようだ。小学生から大学生が対象のミステリーツアーのペアチケットに。
夏休みにどっかに行けたら…と思ってインターネットで探していたところ、これを見つけて応募したらしい。
応募する時、祖父母の許可はとっていて、当たれば今日自宅に郵便であたった知らせと、チケットが届くらしい。
そして今、当たったという報告を受けている。
「でさー最後の関門がお兄ちゃんの許可なんだよね～。おじいちゃんもおばあちゃんもお兄ちゃんが一緒に行くなら行ってもいいって。だからお願い！一緒に来て！旅行に行きたーい！このとーーーり！」
両手を顔の前に当てて必死にお願いしてくる。
練も旅行に行きたいのだが一つだけ問題があった。
学生にとって夏休みの敵…宿題である。

彼は決して真面目な方ではないが、宿題だけは必ずやる。
中学の頃、宿題なんてやらなくてもテストはできる。という理由で宿題を一切やらなかったら、高校受験の時、内申点がひどい事になったのである。危うく浪人するかと思ったが、それは何とか回避した。
今はとある国立大付属の高校に行っている。その理由はもちろん大学の受験費用を浮かせるため。
よって宿題ができないほどの期間だったら行けないというわけ。今年は特に量が多いらしい。

「いつあるんだ？」
「八月の一日から五日まで。四泊五日だよ。」
それなら大丈夫。今年の夏休みは思いっきりｅｎｊｏｙするか。
「いいよ。旅行いこっか。」
「ほんとう！？」

「ｙｅｓ」
「いーーーーっ…やったーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！」
旅行なんてこれが初めてだもんな。こんなに喜ぶのも無理はない。
って、やめろ抱きつくな！暑い！俺の部屋についてあるのは内輪と扇風機だけなんだぞ！
ついでに言うと、もちろん胸は当たってないぞ。
だーかーらー、離れろー。嬉し泣きするんじゃない！ものすごくうれしいのは分かるが抱きついたままだと…あーあー、俺の服、涙と少量の鼻水ですぐさま洗濯機行き。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

旅行に行く事が決まったので、荷物などの準備は彬に任せて、俺は宿題に取りかかる
せっかくの旅行だ。宿題の事なんて忘れていたいもんな。
初めての旅行に行けると決まって彬はいつにも増して笑顔で上機嫌だった。
「「行ってきます！」」
祖父母に言って、俺たちの初めての旅行が始まった。

―2―

楽しみだよ。
自然と顔が笑顔になるのは当たり前だよ。
っていうかならなきゃおかしい。
特に俺の妹…彬の場合は。
今はかなり不機嫌そうだ…。
原因は分かっている。俺だ。

今日、出発の朝に寝坊してしまい予定の電車に乗れず、それでもね足りないのか電車で寝て危うく降り送れるところだったのだ。シメは電車のドアに挟まれる。最悪だった。

おかげで電車を降りてからは一切口を聞いてくれない。ツアーの集合時間に遅れてしまって旅行がぱぁ…にはならなかった。
小学生も含めた学生だけが対象のツアーなので遅刻する人が出てくるだろうという予想を見越しての配慮らしい。
これを知ったのは集合場所でこっそり聞いたのだ。ガイドさんであろう人に。
これが無かったら、彬は俺の事、三ヶ月くらい口を聞いてくれないかもしれなかった。よかったよかった

それでも公衆の面前で恥をさらしたのがいけなかったのか、バスの中で現在、彬は窓際の席に座っていて外をずーーーーっと眺めている。
「ごめんなさい。私が悪かったです。もうこんなへまは二度としませんので許してください」
俺は必死に許しをこう
「…」

彬は何も答えない
「何とか機嫌を直してください」
「…」
「旅行先でなんでも買ってあげるから機嫌直して」
必死になっていたせいかとんでもない事を口にしてしまった。
自分の言った事に気がついたのは顔を上げたところに彬の笑顔があったからだ。
「約束だよお兄ちゃん！」
「…！？」
「今”なんでも買ってあげる”って言ったよね。」
しまった。やっちまた～。帰ってきたら俺の財布はしぼんでいるだろう。
失言だった。
「何にしよっかな～♪ふふふ今から楽しみだ。」
…そういえば。不機嫌な時にこういう風にすぐに機嫌が直る事ってなかったよなぁ。
なにかひっかかる。考えろ。俺。
…もしかして
「まさか…謀ったなぁ！」
「え～そんなことないよぅ。」
「いーや。お前、集合時間より三十分までなら遅れて大丈夫な事知ってたろ！」
「…バレタカ。でも”なんでも買ってあげる”っていったよね。男に二言は…」
「ねぇ！」
乗せられんなよ。俺。と心の中の俺がつぶやいた。
まぁいいや。初めての旅行のスタートがドロドロしてて、それをズルズル引きずるよりいいか。
忘れよう。せっかくだから楽しもう。

「ハーイみなさんこんにちはー。」
バスガイドさんの声が響く。
「それじゃあこれからこのツアーの簡単な説明をいたします。良く聞いてねー」
片耳だけ傾けておくか。浅い眠りに着こうとする。
「じゃーまずはバスの外を見てくださーい」
そんなの見てもビルが立ち並んでいるだけの東京の景色しか映らないだろうに。
そう思って音を閉じたまま眠りに着こうと奮闘していた俺だったが。
車内がざわめく。聞く気はないので何言っているのか分からないが、ざわざわと音を皆立てている。
「お兄ちゃん外見て。ほら。」
彬に顔をつかまれ窓に顔を向けさせられ、自分の目を疑った。
世界が止まっていた。

車内は大混乱…と言っても、立ったり走ったりする人がいるわけではなく、隣の子や前後ろの子と疑問をぶつけあったりしているだけだが、ザワザワした声がやむことはなかった。
「ハイハーイ、皆さん静かにしてー」
ガイドさんが手をパンパンと叩きながら車内にいる人の注目を集めた。
それでも窓の外で起こっている事が気になるのか、皆話す事をやめない。
「ちゅーもーく!!」
ガイドさんがさっきより少し大きな声で注目を集め、車内は静かになっていく。
「まず、外で起こっていることですが、何もかも止まっているように見えるけど、実は止まっていません。ものすごくゆ〜〜〜〜〜〜〜〜っくり時間が流れているだけです。これは皆が今回の旅行を長ーーーーく楽しんでもらうことの処置です。みんな喜べー。」

喜べと言われても素直に「ワーーー」なんて言うやつはどこにもいない。
「えーと混乱を避けるために先にこのツアーの行先を言っておきます。」
既に混乱していると思うがな。心の中で指摘をした。
「行先は…」
ガイドさんは一拍置いてすぅっと息を吸いこんだら
「霊界です！」
ガイドさんは”どうだ！すごいだろう”的な顔をして言った。
「「「「「……！！！！？？？？」」」」」
バスの中にいる乗客（全員学生）は三秒ほど固まって大きく目を見開いたり、隣にいる子と見合わせたり、頭の中で必死に理解しようと首をひねったり、腕を組んだりしている。
もちろん俺や彬も例外ではなく、お互いの顔を目を点にして頭の上に大量のクエスチョンマークを踊らせて見ている。
今やバスの中はクエスチョンマークの大サーカス中になっていた。
「冗談はやめてください。」
ざわめきかけたバスの中にすんだ声が響いた。
練の斜め前方あたりに座っている大学生っぽい男性がたちあがってガイドさんに言った。
その言葉に他の学生たちは「あ～やっぱりそうか。」とか「騙されちまったな、はっはっは」とか、イロイロと各々の頭に浮かんだクエスチョンマークを消していったが
「いいえ、私はいつも大真面目です。」
ガイドさんはまたもや皆の疑問を復活させた。
再び車内はざわめき始める。
「私の言っている事は本当でーす。文句は受け付けませーん。質問は受け付けます。なにかしつもんあるかな～？」
正直俺は半信半疑だった。ツアーを盛り上げるための細工とも思うが、それじゃあバスの外の時間はどうやってゆっくり流すことがで

きるのか説明つかない。
それに外の車は止まっているようなもんで、信号ももちろん全然変わってないから車が前を塞いでいる。
それでもこのバスは前を塞いでいる車に突っ込み、何もなかったように素通りしていった。
バスの窓がそういう映像を見せているわけではなさそうなので、ガイドさんの話だと本当に俺たちは霊界とやらに行くようだが俺の頭の中の常識が「霊界なんて非現実的なところなんて存在しない」と騒いでいてて、頭は軽く混乱状態だった。

練だけでなく他の乗客もそのようだったが、今の彼にそれを確認する余裕はなかった。
他の乗客の中にはもちろん彬も含まれていて彼女は頭の整理をつけようと、練に助けを求めた。
今まで困った時何度も兄が助けてくれた。彬にとって練は困ったときやピンチの時のヒーローで、何でも解決できると信じている。
そこで彬は今回も練に自分の頭の整理を求めた。
練の袖を軽くひっぱりながら聞く
「お…お兄ちゃん、霊界って…なに？私達どこ行くの？」

彬に袖をひっぱられてようやく俺も頭の混乱を棚上げできた。（棚上げと表したのは忘れちゃいけないが、今は解決できない問題だからだ。）
「分からない。」
そう答えることしかできなかった。
彬は不安そうな顔をしていたが、今はそれにさらに不安が上乗せされて顔が真っ青になってしまった。
「ゴメン…お兄ちゃん。これって誘拐かなぁ？変なのに誘ちゃってごめんなさい…。どうしよう、このまま誘拐されたら。うっ…う～…ごめんなさい。」

涙目になってしまい俺の腕に顔をうずめてしまった。体が小刻みに揺れている。混乱と責任感から考えがマイナス方向へ突っ走ってしまい、抑えきれなくなったんだろう。
空いている左手を彬の背中に回し、背中をぽんぽんと叩いて左手だけで（右腕には彬が顔をうずめている）抱いてやり
「心配するな。彬の責任じゃないよ。何があっても守ってやるから安心しな。」
と言ってやった。
彬は震えが一瞬止まり両手で俺の腕を抱き締めた後、顔をうずめるたまま小さくはっきりと頷いた。

さて、守ってやると言った以上何かはしないとな。
やらなきゃいけない何かはすぐ分かった。
情報収集だ。今は頭の中に疑問符が多すぎる。
「質問があります。」
手を挙げそういった。
ガイドさんは一拍ほど間を開けたのち
「いいよ。ドーゾ質問。いくらでもかかってらしゃーい」
そう言った。いくらでもと言ってくれたのは良かった。聞きたいことはたくさんあるからな。
バスの他の乗客はしゃべるのをやめて、俺とガイドさんを見た。
俺はバスの中が静かになったことを確認してガイドさんに疑問を投げつけた。
「霊界ってなんですか？」
「ミステリーツアーなので秘密です。」
「霊界ってどこにあるんですか？」
「ミステリーツアーなので秘密です。」
「霊界に行って何をするんですか？」
「ミステリーツアーなので秘密です。」
「どうやって霊界に行くんですか？」

「ミステリーツアーなので秘密です。」
「…」
「…」
「ミステリーツアーとは便利な言葉ですね。」
「お客様も自由に使っていいですよ。」
うるせぇ！何でも質問してよかったんじゃなかったのかよ！答えになってねぇじゃねぇか！
俺は危うく殴りかかりそうになったが、彬が俺の腕をつかんでいるのに気付き、冷静さを取り戻して再度質問を投げた。
「なぜ答えられないのですか？」
ガイドさんは口を”み”の形にして、閉じ、一拍置いて言った。
「現地で説明します。それまで我慢してください。」
最終的に分かってくるのならいいや。そして俺は最後の質問をする。
「なぜ僕たちが霊界に行くのですか？」
「くじで適当に選んでツアーに参加させたか…！」
ガイドさんは途中であわてて口を閉じて話すのをやめた。がもう遅く、俺には答えは分かった。
へ～なるほど～、くじですか。くじで霊界に行けるならラッキーだなぁ。（無論、霊界ってのが本当なら。）
「そ、そろそろ霊界に着きます。」
ガイドさんはあわてて話を変えた。
「シートベルトはしっかりと外してきちんと座っていてください。」
普通しっかりと着けてだろうに、と思いながらシートベルトをはずそうとしたが、着けてはいなかった。
そう言えばガイドさん、バスに乗る時「シートベルトはしっかり着けて」とは言わなかったな。
「荷物はこちらで預かります。突入時体が光に包まれたりしますが異常はありません。隣の人と手を握った方がいいですよ。」
すると、彬が俺の腕からようやく顔を離して手を伸ばした。目元はまがちょっぴり赤い。

彬の手を握ったと同時に周りが真っ白の空間に変わった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2965z/

想像霊界

2011年12月16日23時45分発行